研究主題

新たな価値を創り出す子供を育てる教育活動の創造

北海道教育大学附属旭川小学校　研究推進委員

Ⅰ　研究主題設定の理由

１　学校教育の今日的課題から

世界は，グローバル化，急速な情報化や技術革新，AIの進化，急激な少子高齢化の影響によって日々変化し続けています。こうした社会的変化の影響は，身近な生活も含め社会のあらゆる領域に及び，子供たちの成長を支える教育の在り方も，変化が求められています。また，現在は「VUCA」時代とも呼ばれ，経済やビジネス，個人のキャリアに至るまで，ありとあらゆるものが複雑さを増し，将来の予測が困難な状態にあると言われています。

吉見（2016）は，「価値の尺度が劇的に変化する時代，前提としていたはずの目的が，一瞬でひっくり返ってしまうことは珍しくはありません。そうしたなかで，いかに新たな価値の軸をつくり出していくことができるか。あるいは新しい価値が生まれてきたとき，どう評価していくのか。（中略）価値の軸を多元的に捉える視座をもった知でないといけない。」（p.75）と述べており，将来の予測が困難な時代の中，他者との協働により，既存の知識や価値から新しい知や価値を生み出していくことが必要になることを示唆しています。

また，「OECD Education2030」においても，個人と社会の「ウェルビーイング」を実現していくために，子供たち一人一人が身に付けていくことが重要な「変革をもたらすコンピテンシー」の一つとして「新たな価値を創造する力」を示しました。

さらに，2022年６月に内閣府の教育・人材ワーキンググループから出された「Society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」では，これらの人間中心時代において「新たな価値創造」が重要なキーワードになることが示されており，この力を育むためには，探究的な学びの推進が鍵であることが述べられています。この新たな価値の創造というキーワードは，これまでの中央教育審議会答申の中でも触れられており，将来の予測が困難な時代を生きていくために重要な要素であることが分かります。

２　本校の教育研究の経緯と，前研究における成果と課題から

本校教育研究においては，これまで「全教科・領域研究による知・徳・体の調和のとれた子供の育成」を基盤とした教育課程研究を進めてきました（図１）。

前研究「探究する子供を育てる教育活動の創造」における成果と課題について，次のように整理しました。

成果の１点目として，児童と教材の出会いの場面における教材提示（問題提示を含む）

【本校の研究経緯】

○平成22年～平成25年「自ら学びを創造する子供を育てる教育活動の展開」

↓

○平成25年～平成28年「自ら学び，考え，行動する子供を育てる教育活動の創造」

↓

○平成28年～令和元年「学びをつなぐ子供を育てる教育活動の創造」

↓

○**令和元年～令和３年「探究する子供を育てる教育活動の創造」**

【図１　本校の教育課程研究の経緯】

の手法や交流活動の設定といった指導の工夫が，児童自身が「問い」を見いだすことに効果的であることが分かりました。

２点目として，「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　総合的な学習の時間編」で示されている学習過程（①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現）を礎とし，単元導入部の構成を確立したり，授業と授業を児童の「問い」でつなぎ，問題解決の過程を繰り返したりする単元構成の工夫が，各教科・領域らしさを生かした「探究型の学び」の実現に効果的であることが確認できました。

３点目として，問題解決に向けて，自ら探究する力を身に付けるためには，蓄積された児童の振り返りを「学習ログ」として活用し，児童自身が自らの学びを自覚するために活用するとともに，教師が個の学びを適切に見取り，指導の改善に生かすことが効果的であることが分かりました。

将来の予測が困難な時代を生き抜く児童にとって，前研究で育成した「探究する力」が必要であることが明らかになった一方で，多様な児童一人一人が探究し続けていけるように自立した学習者として育てていくことが，今後の研究課題として浮かび上がってきました。

具体的な課題としては，一人一人の児童が ICT 等を活用しながら学習の進め方（学習計画，学習方法，自己評価等）を自ら調整できるような指導を充実していくこと，異なる考え方が組み合わさり，よりよい学びを生み出す協働的な学びの在り方を検討していくことが挙げられます。また，教科等横断的な視点で教育課程を編成し，その実施状況を評価して改善を図ることも，課題として挙げられます。

Ⅱ　新たな研究の方向性について

１　本研究で明らかにしようとしていること

これまでの本校の教育研究は，学校教育目標である「主体的人間の形成」の具現化を図るために進められてきており，これは新たな研究についても同様です。

これまでに述べた，学校教育の今日的課題，前研究の成果と課題等を踏まえて，本研究では，児童に新たな価値を創り出す力を育成する必要があると捉えました。

この力は， 将来の予測が困難な時代を生きていくために重要な力であり，その育成にあたっては，前研究で取り組んだ「探究型の学び」の推進が鍵となります。

そこで，研究主題を「新たな価値を創り出す子供を育てる教育活動の創造」と設定しました。

２　本研究で求める子供の姿

本研究で求める「新たな価値を創り出す子供」の姿を，次のように捉えています。

自ら「問い」を見いだし，その解決策を模索し遂行することを通して，探究し続けることの価値を見いだす姿

先述の通り，新たな価値を創り出すためには，「探究型の学び」の推進が鍵となります。つまり，自立した学習者として児童が探究し続けることが求められます。しかし，それは簡単なことではありません。探究し続けることの価値を児童が見いだせていなければ，探究は持続しないからです。そこで，本研究では，探究し続けることの価値として，以下の３つを設定し，それらを児童が見いだす姿を「新たな価値を創り出す子供」としました。

探究し続けることの価値
①自ら問いをもって，探究することの価値
②人と関わり，協働して探究することの価値
③探究する中で得た内容知や方法知

Ⅲ　主な研究内容及び研究計画

本研究における主な研究内容は，次の３点です。

１　各教科・領域における「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現する授業デザイン
２　自己調整する子供を育てる，各教科・領域の学習づくり
３　新たな価値を創り出すためのカリキュラム・マネジメント

上記に示した主な研究内容を基に，本研究における３年間の主な研究内容を，次のように設定しました。なお，研究１年次は研究の構想期，研究２年次は研究の実践期，研究３年次は確立期と押さえます。

各年次の研究内容	主な研究内容
【１年次】 各教科・領域における「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現する授業デザイン	・各教科・領域における「探究型の学び」のイメージの確立 ・各教科・領域における「個別最適な学び」と「協働的な学び」の押さえと手立ての明確化
【２年次】 自己調整する子供を育てる，各教科・領域の学習づくり	・各教科・領域における「自己調整学習」 ・子供が新たな価値を創り出すための振り返りの工夫
【３年次】 新たな価値を創り出すためのカリキュラム・マネジメント	・教科等間のつながりを意識した単元設計 ・「新たな価値を創り出す子供」に迫るための見取りと指導への生かし方

【１年次の研究】

各教科・領域における「個別最適な学び」と「協働的な学び」

全体研究を受け，児童が探究的な学びを通して，新たな価値を創り出すために，１年次研究においては「個別最適な学び」と「協働的な学び」に焦点を当てて，研究を進めました。

中央教育審議会（2021）「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）」（以下，Ｒ３答申）では，「個別最適な学び」とは，学習者にとって最も適した条件や環境のもとで自らの学びを成り立たせていくことであり，「個に応じた指導（指導の個別化と学習の個性化）」を学習者の視点から整理した概念であると示されています。また，「協働的な学び」とは，学習者同士が意見の交換など対話を通して教え合い，お互いを高め合う学びと示されています。Ｒ３答申の内容を基に「個別最適な学び」と「協働的な学び」を以下のように整理しました。

個別最適な学び

◆指導の個別化

・子供一人一人の特性・学習進度・学習到達度に応じ，教師は必要に応じて重点的な指導や指導方法・教材等の工夫を行う

⇒ 一定の目標を全ての子供が達成することを目指し，異なる方法等で学習を進める

◆学習の個性化

・子供一人一人の興味・関心・キャリア形成の方向等に応じ，教師は一人一人に応じた学習活動や課題に取り組む機会の提供を行う

⇒ 異なる目標に向けて，学習を深め，広げる

協働的な学び

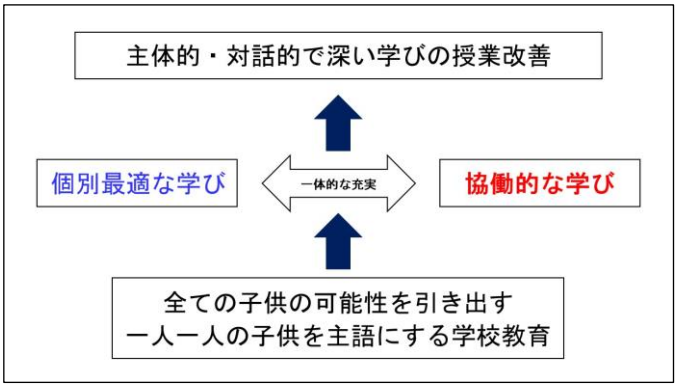
・子供一人一人のよい点や可能性を生かし，子供同士，あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働する

⇒ 異なる考え方を組み合わせ，よりよい学びを生み出す

【図２　「個別最適な学び」と「協働的な学び」】

Ｒ３答申では，「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図ることを通して，「全ての子供たちの可能性を引き出す」ことと「一人一人の子供を主語にする学校教育」の実現を目指しています。また両者を一体的に充実し，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていくことを求めています（図３）。

「主体的・対話的で深い学び」は，子供たちが，学習内容を人生や社会のあり方と結び付けて深く理解し，これからの時代に求められる資質・能力を身に付け，生涯にわたって能動的に学び続けることが



【図３　「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実】

できるようにするために「どのように学ぶか」を示したものであり，授業改善の３つの視点でもあります（図４）。

<table>
<tr><th colspan="2">（１）「主体的な学び」が実現できているか</th><th rowspan="2">（３）「深い学び」が実現できているか</th></tr>
<tr><td colspan="2">①学ぶことに興味や関心をもち，
②自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら，
③見通しをもって粘り強く取り組み，
④自己の学習活動を振り返って次につなげる。</td></tr>
<tr><td colspan="2">（２）「対話的な学び」が実現できているのか</td><td rowspan="2">①習得・活用・探究という学びの過程の中で，
②各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら，　↓
③（向かう「深い学び」の姿）
a 知識を相互に関連付けてより深く理解したり，
b 情報を精査して考えを形成したり，
c 問題を見いだして解決策を考えたり，
d 思いや考えを基に想像したりする。</td></tr>
<tr><td>①子供同士の協働，⇒
②教職員や地域の人との対話，⇒
③先哲の考え方を手掛かりに考える。⇒</td><td>a 自己の考えを広げ深める。</td></tr>
</table>

【図４　授業改善の３つの視点】

前研究で明らかにした各教科・領域における「探究型の学び」は，総合的な学習の時間で示された学習過程（①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現）を礎とし，探究の原動力となる「問い」を自ら見いだし，その解決策を多様な他者と協働しながら模索し続ける問題解決の学習過程を繰り返します。この学習過程は，子供の主体性や協働的な学びを重視しており，どの過程においても「主体的・対話的で深い学び」を実現することができます。

このことから，「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実は，前研究で明らかにした各教科・領域における「探究型の学び」を更に加速させ，児童一人一人が自立した学習者として探究し続けることに寄与すると捉えました。

そこで，１年次研究においては，各教科・領域における「個別最適な学び」と「協働的な学び」の在り方の提案を目指します。

Ⅳ　引用・参考文献

・小学校学習指導要領(平成29年告示)解説　総則編　文部科学省　平成29年６月
・幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）　中央教育審議会　平成28年12月
・「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）　中央教育審議会　令和３年１月
・Society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ　内閣府　教育・人材育成ワーキンググループ　令和４年６月
・「文系学部廃止」の衝撃　吉見俊哉　集英社新書　平成28年２月
・「学校」をつくり直す　苫野一徳　河出書房新社　平成31年３月
・OECD Education2030プロジェクトが描く教育の未来:エージェンシー，資質・能力とカリキュラム個に応じた指導・学習プログラム　白井俊　ミネルヴァ書房　令和２年12月